



令和2年度 清水小学校だより

令和2年10月13日発行

清水の子

文責 校長 沖島 宏幸

しっかり考える子 ・ 自らよく行う子 ・ すこやかな子

今日から後期が始まります

秋の夜の美しい月を見ながら、ご家庭ではどんな会話が交わされているでしょうか。

10月は、芸術・スポーツ・読書の秋にふさわしく、新型コロナの影響で制限はありますが、いろいろな行事が計画されています。大変過ごしやすい時季となりました。



さて、今日から後期が始まりました。学校ではこの半年、ご家庭や地域の皆様のご協力をいただきながら学校教育に取り組んでまいりました。子どもさんの成長ぶりはいかがだったでしょうか。

前期の反省を生かし、新たな決意をもって頑張ってもらいたいと願っています。後期も、どうぞよろしくお願いいたします。

ほめる時は、心と顔で！時には、体で！



「ほめる」という時、私たちはまず言葉を中心にして考えがちです。しかし、「ほめ方」に限らず、「叱り方」にしても「奮起を促す」ことにしても、人が人に思いを伝えていく上で重要なのは、心の奥の思いをのせた声や顔の表情ではないでしょうか。

コミュニケーションとしてはたらく言葉の要素は8%で、言葉の調子30%、顔の表情が55%という調査結果を目にしたことがあります。

また結果主義による「できたか」「できないか」が子どもをほめる物差しとなりがちであるため、ほめ言葉も「よくやったね」「頑張ったね」「いい子だね」「頭がいいね」等々が多くなってしまい、その子の長所を認めるということはついつい少なくなりがちです。

「〇〇のお世話がよくできたね」「よく動いて〇〇をしたね」等の自制心がある、責任を果たす、注意深い、よく考える、陰ひなたがない、ねばり強い、誠実である、判断がよい…等ほめる視点はいくらかでもあります。こうした態度をほめて認めていくことが、様々な問題に直面した時の解決の力となります。もちろん、やりたくないことでもやらなければならないことは、心から奮起を促し、やりたくてもやっちはいけないことには、心から叱らなければいけません。

そして「すごいじゃない」「ありがとう」という本気の心と顔で、時には体で子どもの行為や行動を機会あるごとに、ほめてまいりましょう。

家庭で育ち、学校で学び、地域で生きる清水小の子どもたちのために…。